

【調査報告】

長崎外国語短期大学・長崎外国語大学における語学教育の沿革
－長崎外国語大学名誉教授・戸口民也氏への聞き取り調査－

富田高嗣・藤本健太郎

**History of Language Education at Nagasaki Junior College of
Foreign Languages and Nagasaki University of Foreign Studies:
Interview with TOGUCHI Tamiya, Professor Emeritus, Nagasaki University of
Foreign Studies**

TOMITA Takatsugu, FUJIMOTO Kentaro

Abstract

Nagasaki Gakuin School Corporation its 80th anniversary in 2025. This issue features an interview with TOGUCHI Tamiya (Professor Emeritus, Nagasaki University of Foreign Studies), who has taught at Nagasaki Gakuin for many years, starting from his days at Nagasaki Junior College of Foreign Languages.

We interviewed Toguchi about his research, his passion for teaching, the significance of learning foreign languages, and his recent activities.

キーワード：語学教育、長崎外国語短期大学、長崎外国語大学、長崎学院、大学史

はじめに

長崎外国語大学を運営する学校法人長崎学院（以下「長崎学院」と略記する）は、2025年に創立80周年を迎えた。

長崎学院の沿革を知るための参考文献として筆頭に挙げられるものが、2008年に長崎学院創立60周年記念誌編集委員会の手によって発行された『長崎学院創立60周年記念誌』であろう。

同書は1945年の創立以来、2005年ごろまでの出来事を四部に大別して、学内に所蔵されている資料を中心に、時には新聞記事やインタビューなども織り交ぜながら詳細な叙述を試みている。資料編や年表、教職員及び学生に対するインタビュー記事も充実しており、大学史の成果物として好個の存在と評価できる。

その後、2016年4月の新長崎学研究センター発足に先立って、2015年に刊行された『長崎学院創立70周年記念誌―「新長崎学」への出発―』では、石川昭仁氏によって中期計画「長崎外大ビジョン21」（2014年度～2020年度）の策定及び、当時の長崎外国語大学が直面していた2008年ごろの経営危機を受けた経営改善計画（2009年度～2013年度）の取り組み、「学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律」の施行とあわせて整備した大学ガバナンス改革（2015年4月）の骨子など、当時の大学運営に関する詳細な解説が行われており、こちらも大学の沿革を知るうえで重要な成果である。

しかしながら、長崎外国語大学の教育活動の中心に位置づけられる語学教育の取り組みとしては、一部教員による学内寄稿論文の掲載と年表の追記が行われるにとどまり、同書において2005年以降の動向が網羅的に紹介されることはなかった。

『長崎学院創立60周年記念誌』の発行から20年近くの歳月が経過、さらには教職員の退職・物故などの要因も重なり、主に4年制大学設置以降の大学運営、語学教育、研究活動の詳細について知るための手がかりが徐々に失われている現状にあるといえるだろう。

長崎外国語短期大学・長崎外国語大学における語学教育の沿革を知るための手がかりとして、1972年から2012年まで長崎外国語短期大学・長崎外国語大学で教鞭を執った、長崎外国語大学名誉教授の戸口民也氏（フランス語専修）に対し、これまでの研究・教育活動への取り組みや、外国語を学習することの意義、さらには近年の社会貢献活動などについて聞取調査を実施した。

戸口氏に聞取調査への協力を依頼した理由としては、在職中に学部長や学生部長などの要職を経験されており、4年制大学設置時のカリキュラム策定にも携わるなど、本学での語学教育全般に関する豊富な知見など有しておられること、前掲の『長崎学院創立60周年記念誌』の編纂にあたっては編集委員会委員を務め、長崎学院の沿革にも知悉しておられることを挙げておきたい。

2025年5月13日に長崎外国語大学第2会議室で行われた聞取調査では、富田がインタビューとなり、一問一答形式で戸口氏からお話しをうかがった。記録（録音及びメモ）は藤本が担当した。

なお、戸口氏からは事前に富田・藤本が作成した質問項目に沿って回答内容の概要をデータで提供いただくことができた。そのため、本稿は戸口氏の提供データを参考に、インタビューで得られた内容を加筆修正しながら富田・藤本両人の責任のもと編集したのものとなっている。

1. 研究に関する取り組みについて

フランス17世紀演劇研究を志されたきっかけ、研究の魅力を教えてください。

小学生の頃から子供用にリライトされたヨーロッパの物語・小説をよく読んでいまし

たが、中学生になると生意気にも原作をそのまま翻訳したのも読みはじめました。高校生になってからは小説から戯曲へと関心が広がり、シェークスピアなどを（翻訳でしたが）読むようになりました。とくに気に入ったのがマリヴォーというフランスの劇作家です。小説や映画も含めてフランスのものが性に合うなど感じたので、大学は仏文科に入りました。

フランス演劇とくに17世紀演劇を選んだのは、1966年、大学2年のときにラシーヌの悲劇『アンドロマック』を見たことがきっかけです。劇団四季が日生劇場で上演したものでした。大学入学当初から卒業論文のテーマはどうしようかと考えていたのですが、この劇を見てラシーヌに決めました。歌舞伎や文楽も見に行く演劇好きの学生にとって、ギリシア古典の影響を継承するフランス古典劇との出会いは大きかったです。

17世紀という時代はフランスにとって、いわば黄金時代でした。哲学、思想、文学、演劇、美術、音楽、建築など、様々な分野ですぐれた人物たちが続出し、ヨーロッパに大きな影響を与えることになった時代です。

大学・大学院ではラシーヌをテーマに卒業論文、修士論文を書き、長崎に来てからもラシーヌを続けていたのですが、17世紀当時の演劇、とくに劇場や舞台、俳優、観客について調べるのが面白くなり、今に至っています。

2. 語学教育・語学学習に関する取り組みについて

長崎外国語短期大学・長崎外国語大学でどのような授業を担当なさっていましたか。

1972年4月に長崎外国語短期大学に赴任しましたが、そのとき担当した科目で今も覚えているのが「1年フランス語文法」と「文学概論」です。

初学者向けの文法を教えるために、徹底的に仏文法を勉強し直しました。そのとき気づいたのは、自分の文法理解度はなんと浅いことかということです。「教えることによって学ぶ」とか、「しっかり学ぶためには教えることだ」などと言われていたりすることがありますが、たしかにその通りだと感じました。

もうひとつの「文学概論」ですが、担当科目を知らされたときは、めまいがしました。25歳の若造がそんなだいそれたことをと。経験を積んだベテラン教授が担当するような科目ですから。これも必死に準備しました。自分が知っている僅かな知識を総動員し、なんとか授業ノートを組み立てて、毎回冷や汗もので教えていました。当時の学生の一人と15年くらい経って再会したとき、その授業のことが話題になりましたが、「全然わからなかった」そうです。さもありなん…。

赴任初年の「1年フランス語文法」と「文学概論」は別として、特別に思い入れをもって臨んだ科目はありませんね。どれも大事な科目ですから。1年生や2年生のフランス語講読とか、2年生のフランス文学、英語専攻生のためのフランス語などを担当してい

たと思います。

ただし、1990年代はじめごろだったと思いますが、石川昭仁先生と相談して「日本語表現法」という科目をつくりました。大学設置以降も同じ趣旨の科目を用意し、重要科目として位置づけました。もちろん、自分でも担当しました。

外国語を学ぶのが長崎外国語短期大学・長崎外国語大学の基本ですが、日本の高校までの国語教育では、感想文のようなものは書かせても、レポートや論文を書くための文章作法を教えていません。資料を調べ、それを踏まえて自分の意見を述べるというような文章です。大学に入るとレポートを書かされますが、それに対する準備はできていません。仕方がないので、大学でやるしかないというわけです。

それと同時に、日本語つまり自分の母語に対する認識を深めることが、外国語学習にも必要だと考えました。言葉に対するこだわりというのが、わたしにはずっとありましたから。言葉を学ぶということは、自分自身を見つめ直すことでもあります。自分の考え方、ものの見方、生き方を。

「言葉を学ぶということは、自分自身を見つめ直すこと」という表現は、語学教育・学習を考える上で重要なキーワードであると感じます。お考えを詳しく教えてください。

それは、人は言葉によって考えるからです。わたしたちのものの見方、とらえ方、感じ方、理解する仕方は、わたしたち自身が獲得した言葉に――母語だけでなく身につけた外国語にも――依存しているからです。「言葉」がわたしたちのあり方、生き方を方向付けているからです。

人は言葉によって考え、対象を――姿や形がある具体的な「もの」であれ、具体的な形をもたない抽象的な「概念」であれ――、言葉（つまりその対象がもつ「名前」）によって認識し、把握し、理解します。

ところが、名前のない「もの」や「こと」、あるいは名前を知らない「もの」や「こと」は、たとえ実際に存在しているとしても、それと認識されません。これはとくに、抽象概念についてははっきり言えることです。

姿・形がある「もの」なら、たとえ名前を知らなくとも、それを目の前にすれば、そこに「何か」があることは認識できます。でも、それが何であるかは、分かりません。その「何か」と似ている「それ」を知っているなら、「それ」との類似を手掛かりに、その「何か」を理解しようとするでしょう。ただ、その「何か」の名前も「実体」も分からないままだったとしたら、自分が知っている「それ」と似たものようだけれど、それ以上は分からないままにいるしかないでしょう。

ところが抽象概念はどうでしょう？ その「名前」を言葉として知っていなければ、それについて考えることはおろか、想像することさえできません。たとえその「名前」を示す言葉に出会ったとしても、意味を理解することはできないのです。ただ意味不明

の「音」として聞こえるだけ、意味不明の「文字」として目に見えているだけ、あるいは「文字」とすら認識できずに、意味不明の記号のようなもの——点とか線とか筋——が見えるだけかもしれません。わたしたちがまったく知らない外国語にいきなり出会ったとき、それを音として聞いたとき、あるいは文字、あるいは記号のようなものとして見たときの反応は、たぶん、そんなものでしょう。

そのような点に「言葉を学ぶ」ことの意味が生まれてくるということでしょうか。

ひとつ試しに、言葉のない世界を想像してみてください。

《言葉がないって、どういうことなのだろう……》

ほら、すでに、言葉でそう考えていますね。「言葉」ということばも「世界」ということばも、「ない」ということばも、言葉として存在しないのです。

たとえ「もの」や「こと」が存在するとしても、それを示す「名前」が一切ない世界、「名前」がわからないのでそれが「何」なのかまったく分からない——そんな世界をどうやったら「想像」できるでしょう？

意味不明の「何か」だけがある世界、意味不明の「何か」だけしかない世界、意味不明の「何か」だらけの世界……。気持ち悪くありませんか？

なぜ最初からいきなり、こんな訳の分からないことを言い出すのかと、怪訝に思われたかも知れません。それは、わたしが言葉にこだわる人間だからです。

なぜ言葉にこだわるかは、すでにお話ししたように、人は言葉によって考え、言葉によって対象を認識し、把握し、理解するからです。そしてこのこだわりは、わたしがこれまでしてきた仕事を通じて身についたものです。

「外国語を学ぶ意味」についてどのようにお考えになりますか。

フランス語の習得を通じて、自分の慣れ親しんできた世界——ものの見方、考え方、常識——とは違った世界があることを学んでほしいと思いながら、学生に接してきました。言葉が違えば、世界の見え方も、考え方も、随分と違って来るからです。

自分の常識や固定観念から一歩も二歩も外に出て、違った世界に自分をおいて見ること、それが「狭い自分の殻」を打ち破る第一歩となります。

ゲーテは「外国語を知らない者は自分自身の言語について何も知らない」とも言っています。また、言葉を学ぶ意味について、フランスの哲学者で批評家のロラン・バルトは、こう言っています。

Apprendre une langue, c' est apprendre comment l' on pense dans cette langue.

— Roland Barthes (1915-1980)

ある言語を学ぶということは、その言語で人はどう考えるかを学ぶことだ。

世界には様々な言語がありますが、それぞれの言語にはその言語固有の特徴・個性があります。それは、言語によってものの見方、とらえ方、認識の仕方が異なるということです。

そのことは、外国語を学ぶことによって、知ることができます。そして、外国語と自分の言語とを比較し、違いを知ることを通じて、自分の言語特有のものの見方や認識の仕方を知ることができるようになります。つまり、自分の言語を客観的に見ることができるようになるわけです。

反対に、外国語を知らなければ、自分の言語を客観的に見ることはできないでしょう。別の言語と比べることによってはじめて理解できる違いを知ることなしには、自分の言語の特徴や個性を知ることにはできないでしょう。まさにそれが、ゲーテの言っていることです。

他の言語を母語とする人々と対話・コミュニケーションを成立させるために必要なこととは何でしょうか。

対話・コミュニケーションが成立するためには、まず違いを受け入れることが必要です。外国語学習は、そのための良い訓練の機会となるでしょう。

できれば複数の外国語をしっかりと学んでほしいですね。ひとつの外国語しか知らないと、今度はその外国語がまた一つ別の固定観念——つまり、外国語というのはこういうものだという思い込み——をつくる原因になるおそれがあるからです。複数の外国語を学べば、それぞれを比較することで、より客観的に言葉を見る目が養われるようになります。学べば学ぶほど、自分の言語とそれぞれの外国語との違いがよく分かってくるものです。

外国語を——そして自分とは違った考え方・見方をする人たちが存在することを知らないなら、そのことを実感できないなら、自分の考え方・見方を絶対視してしまう危険があります。自分とは違う考え方をする人たちを理解することができず、最悪の場合、その人たちを拒絶し排除してしまうことになるでしょう。そうなると、もはや対話は成立しません、コミュニケーションは不可能となります。

つまり、言語の多様性を通じて文化の多様性を知り、理解することができるようになるということです。

違いを理解できれば、それを受け入れることもできます。たとえよく理解できないことがあっても、理解し合えないことがあったとしても、それを受け入れることができるようになるでしょう。謙虚に、寛大に、自分とは違う人を理解し、受け入れることができるようになるでしょう。

言葉を学ぶ、外国語を学ぶということは、今まで知らなかった世界に向かって自分を開くこととも言えるでしょう。

3. その他の研究・教育活動に関する取り組みについて

長崎外国語大学において情報処理やPCを利用した教育・環境整備を積極的に手掛けられたとのことですが、発案に至った経緯や印象に残っておられることを教えてください。

キャンパスが住吉からいまの場所に移転したとき、これも石川先生といっしょに考えたことですが、当時では珍しかった学内LAN（情報ネットワーク）を設置し、どの教室や研究室からでも情報ネットワークにアクセスできるようにしました。長崎という地理的ハンディを克服するにはこの手段を使うのが最善の解決策だと考えたからです。

自分の研究のための文献や資料を手に入れるためには、わたしの場合だとフランスと直接コンタクトを取る必要がありました。フランスの、その分野の専門書店と関係を作り、カタログを送ってもらい、あるいは問い合わせて、ほしい本を手に入れていました。フランスに行く機会があればその書店を訪れて本を物色する、あるいはフランス国立図書館に行って、資料を探すなどです。インターネットを使えば、それが随分と便利になるはずだ、情報へのアクセスも簡単になるはずだとおもいました。確かにそうです。

そのときから30年が経ちましたが、まさに予想したとおりにになりました。

4. 泉町キャンパスについて

泉キャンパス時代の思い出を教えてください。

主な学内行事としては、もちろん外語祭がありました。教職員・学生ともに賑やかにさわいでいました。最後はキャンプファイヤーのような火を盛大に燃やして締めくくっていましたが、今ではできないでしょうね。

キャンパス内で講演を頼まれたこともあります。1970年代の終り近い頃だったと思います。「言葉を学ぶ意味」という題で話しました。わたしがずっとこだわっていた（今でもこだわっている）テーマです。随分気合を入れて準備したことを覚えています。残念ながら、お客はあまり来ませんでした。

各言語の暗唱大会もありました。ある年、暗唱大会のときに大雪が降って、家に帰るのに何時間もかかってしまいました。長崎の狭い道に、雪で立ち往生した車がいっぱいになって、動きが取れなかったことを思い出します。

当時のキャンパス周辺の面影は、いまは跡形もありません。マンションが建ち、道路も広げられ整備されています。入口だった場所にキャンパス跡地の碑がありますが、それだけです。当時の学生たちはみな、陽気で、屈託がなく、元気いっぱいでしたね。今も多分そうでしょうけれど。

5. 近年の社会貢献活動について

近年取り組まれている研究・教育・社会活動があれば教えてください。

16世紀末から17世紀はじめに活躍した、ある俳優の評伝に取り組んでいます。実は、若い頃に始めた研究課題だったのですが、中断したまま長い時間が経ってしまいました。いわば店晒しにされた宿題のようなものです。これだけはなんとか仕上げないとけないと思っていますが、なかなか進みません。

数年前から取り組んでいるのは、ジャック・フィリップというフランスの司祭の著作の翻訳です。ところが本を出してくれる出版社が見つからないので、自分で出版業を始めました。それが戸口書店です。パソコン一台で、翻訳から編集、表紙のデザインまで、全部一人でやっています。戸口書店についてはこのサイトをどうぞ。(https://toguchibase.shop/)。

おわりに

今回の聞取調査で得られた成果の一部を、広く卒業生・在学生の目に触れることを目的として、長崎外国語大学の学内報『ぶどうの樹』vol.35の特集記事「当時の恩師はいま……」に掲載している。こちらについてもあわせて参照されたい。

また、戸口氏からは大学運営の沿革に関しても、貴重な情報の教示を受けることができた。ただし、紙幅の都合もあることから別稿での掲載を期したい。

今後とも大学史編纂に向けた聞取調査は継続して取り組む所存である。

参考文献

『長崎学院創立60周年記念誌』長崎学院創立60周年記念誌編集委員会編、2008年
『長崎学院創立70周年記念誌―「新長崎学」への出発―』学校法人長崎学院長崎外国語大学、2015年

謝辞

本稿の執筆にあたって、聞取調査に対するお力添えはもとより、調査報告の内容確認など快くご対応くださった戸口民也先生に対し、心から御礼申し上げます。

本研究はJSPS 科研費「多文化共生のための国内大学間オンライン PBL 共修プログラムの開発と検証」(基盤研究(C)、課題番号:24K06130)の助成を受けたものです。

メールアドレス tomita@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

fujimoto@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp